

朝鮮族の深圳市への移動と エスニック・コミュニティの形成

南 玉 瓊

目次

はじめに

第1章 エスニック・コミュニティの定義と理論

第2章 朝鮮族の深圳への移動の実態と移動要因

第3章 深圳在住朝鮮族の社会状況

第4章 深圳朝鮮族コミュニティの形成とその機能

—広東省朝鮮民族連合会と世界海外韓人貿易協会（OKTA）深圳支部を核とする展開—

おわりに

はじめに

中国朝鮮族のコミュニティに関する研究は、海外への移動後のそれと、中国国内におけるそれに大別されるが、後者についてはさらに、従来は伝統的居住地域である中国東北部におけるコミュニティが主流であったが、近年では、国内の移動先におけるコミュニティ創出に関する研究もなされている。その代表としては青島市、北京市（芮, 2010）における朝鮮族コミュニティの研究がありとりわけ青島市の朝鮮族コミュニティ研究が盛んに蓄積されている。

以下ではそうした先行研究を紹介しながら、本稿の方向性の輪郭を提示することにする。本稿に特に関連する先行研究は2点である。

先ず権・朴（2004）なのだが、そこでは、朝鮮族の移動がすなわち朝鮮族コミュニティの解体をもたらしているのか否かが、村の訪問とインタビュー調査をもとにして検討され次のような結論が導き出されている。第一に、朝鮮族の大規模、遠距離移動は、朝鮮族コミュニティの解体を意味しているわけではない。第二に、朝鮮族の移動には次のような特徴がある。一つは

都市化傾向であり、今一つはより広い地域へのコミュニティの分散とコミュニティ内部における高い集中度である。第三に、朝鮮族の都市コミュニティは居住地域の隔離によって成り立っているわけではなく、民族的な文化的アイデンティティの強調によって成り立っている。

次いで朴(2014)である。現代中国の民族政策は中華人民共和国成立当初の社会的背景において策定されたものなので近年の民族人口の大移動などによって社会的背景が激変する状況において、どのような対策を取るべきかを、朝鮮族を事例とし、文献調査と現地調査をもとに検討している。その際に次の4項目、すなわち①朝鮮族が都市化の中での変化：都市化率、人口分布、業種分布、②朝鮮族が都市化の中で直面している問題（人口、コミュニティ、文化事業、教育）、③環境の変化に対応するための工夫（各種民族コミュニティの再構築運動）、④朝鮮族の都市化過程から見える理論と政策的含意などを指標として、次のような結論を導き出している。まず、中国の都市化には外生型的特徴——農村から都市への人口移動によりなされる人口の都市化——があり、少数民族の人口移動は必ず伝統的居住区の制度に影響を受けていること、都市化過程で少数民族は民族アイデンティティを放棄するのではなく、さまざまな形式で民族コミュニティの再構築を図ることで維持しようとしていることを明らかにした。

そのうえで、本研究の問題関心に即して、コミュニティの再構築部分をより詳しくみる。朴(2014)において、国内移動先における朝鮮族コミュニティの再構築は、次の①～⑤のような側面で追及されている。①東北では政府から支援が得られやすい観光・展示用の「民族文化園」を積極的に作っているのに対し、大都市・沿岸都市では自発的に「民俗文化節」のような祝祭を催している。②知識人や民間人自身が、朝鮮族の歴史資料を整理し、朝鮮族の歴史や地方朝鮮族史などを編纂している。③中国の朝鮮語新聞社（黒竜江新聞社）が朝鮮族の人口移動を追いながら、東北三省を越え沿岸地区や韓国に支社を置いて現地の朝鮮族社会を報道したり、インターネット上でも閲覧できるようにサービスの幅を広げている。④移動先において自発的に民族団体や各種協会を結成している。⑤IT技術の発展とともに、インターネット上で朝鮮族コミュニティを構築している。以上の側面から朝鮮族はコミュニティの再構築を行っていることが示されている。

以上の先行研究は、朝鮮族コミュニティの全体構造が都市化の中で変化しているだけではなく、移動先においてコミュニティが再構築されていることを明らかにし、移動による朝鮮族コミュニティの解体説を否定している。しかし、移動先における朝鮮族コミュニティが誰の主導で、いつから、どのようなプロセスで作られ、どのような活動をしているのか、またその活動の中で、成員のアイデンティティはどのような影響を受けているのかについては触れていない。また、移動先として大都市が、北京や青島などに限られており、改革開放の先端を走る都市、例えば、深圳市などについては全く言及していない。深圳市は改革開放の第一都市であり、多くの出稼ぎ労働者の移動先であり、かつ多くの外資系企業の流入地であるにも関わらず、深圳

の朝鮮族コミュニティに関する先行研究は管見の限り皆無なのである。

したがって、本稿においては、既述の先行研究の示唆を受け止めつつも、深圳市の朝鮮族コミュニティを研究対象としてそこにおける朝鮮族のコミュニティの形成プロセスとそれが成員のアイデンティティ形成に果たす機能を明らかにすることを目的とする。

そのために研究視角として原初性論、用具論、実践コミュニティ論を統合したアプローチを用い、研究方法としては深圳朝鮮族の社会状況についてマクロなデータを用いて整理し、コミュニティの形成と機能については主にインタビュー資料によって描出を試みることにする。

以下の本論の構成は次のとおりである。第1章では本稿で用いるエスニック・コミュニティの理論的フレームワークを提示する。第2章では、朝鮮族の東北から深圳への移動がいつ、なぜ、どのような人々によって、いかになされてきたのかについて述べる。第3章では、深圳在住の朝鮮族がどのような特徴を持っているかを、マクロデータの分析から把握する。第4章では、主に現地調査に基づき、広東省朝鮮民族連合会と OKTA 深圳支部を核として朝鮮族コミュニティがいかなるメカニズムで動いているかを分析する。

第1章 エスニック・コミュニティの定義と理論

1. エスニック・コミュニティの概念

リチャード・シャマーホーン（Richard A. Schermerhorn）は1970年の論考でエスニック・コミュニティについて以下の定義を下した¹⁾。

「エスニック・コミュニティをここで定義しておく、より大きな社会の中にあつて、実際の或いは推定上の共通の祖先と、共有する歴史的過去の記憶を持ち、彼らの民族性（peoplehood）を典型的に表しているとされる一つまたは複数の象徴的要素に文化的焦点をおいているような一集団であり（中略）不可欠な点として、構成員がその一員としての自覚を持っていることがあげられる」（Schermerhorn, 1970）。

本稿のエスニック・コミュニティの概念もこれを踏襲する。

2. エスニック・コミュニティの形成過程に関する諸理論

エスニック・コミュニティが形成される過程に関する考察は、土田（2007）によれば概ね4種類の異なるアプローチに分類することができる。つまり、①原初性論者（primordialist）的アプローチ、②用具論者（instrumentalist）的アプローチ、③交流論者（transactionalist）的アプローチ、④エスノ＝シンボル論（ethno-symbolic）的アプローチである²⁾。

本稿ではこのうち、原初性論と用具論に注目する。交流論的アプローチ、エスノ＝シンボル論的アプローチは深圳の事例についていえば、後述するように、それぞれ該当する事実が見当

たらないためである。以下で、それぞれのアプローチについて説明する。

原初性論の代表的論者はクリフォード・ギアーツ (Clifford Geertz) である。ギアーツは多民族・多言語の諸国の経験を観察し、そうした国々の不安定さは、その国民の自意識が「血、人種、言語、地域性、宗教、伝統」と分かちがたく結びついていることから発生すると考え、これらの要素を「原初的愛着」と呼んでいる³⁾。しかし原初的愛着はコミュニティ形成の基礎にあるものではあるが、それでもって具体的なコミュニティ形成のロジックもプロセスも説明できない。

用具論の代表論者のポール・R・ブラス (Paul R. Brass) は、エスニック・コミュニティとは特定のエリート層が、時代状況が大きく変化していく時期に創造するものであると論じている。ブラスによると、政治権力と経済的利益をめぐるエリートや権力者の間の競争が第一の動機となって、エリート層は一般大衆の間のエスニックな自覚の覚醒を促し、彼らを自らの目的のために動員していくのだという。このアプローチはエスニシティの静的な見方を脱しているものの、エスニックな結束が呼び起こす感情の強さについては説明できないという批判を受けてきた。

ブラスの用具論はコミュニティの創造や変容を説明することはできるが、コミュニティに参加する人々の動機を説明できない。用具論の積極性を継承しつつその限界を克服する試みとして実践コミュニティ論がある。例えば、田辺 (2008) は、人々が想像的、再帰的な実践の中でコミュニティを構築していく過程を考察し、コミュニティは人々の欲望、想像や思考の展開の中で実践的に作られていくと論じた。論証方法は、まずブルデューやレイヴ／ウェンガーらの実践理論を批判的に検討し、コミュニティが多様な権力作用で形成されることに注目する。それは北タイの霊媒カルトやエイズ自助グループの研究において、病者や感染者たちがコミュニティのなかで自己と他者、権力の諸関係を想像的、再帰的な実践をとおして創りなおしていく過程に焦点をあてるものであった。結論は、彼らの実践の資源となるのは合理主義的知であるよりは、むしろコミュニティに埋め込まれた自分たちの〈生〉にかかわる解釈学的知である⁴⁾。

本稿においては、原初性論をベースに置きながら、用具論と実践コミュニティ論をもって、深圳市朝鮮族コミュニティの形成を説明する。

第2章 朝鮮族の深圳への移動の実態と移動要因

1. 深圳市の少数民族人口推移

1964年に深圳に居住する少数民族は民族数が10で、人口はわずか106人にすぎなかった。しかし、2008年にすべての少数民族が居住するようになり、2011年には79万5000人にまで増加した。このような深圳市における少数民族人口の急激な増加はどのように起きたのか。李

表 2-1 深圳市の少数民族人口の推移表

| 年度 | 少数民族数 | 少数民族人口(人) | 年平均増加人数(人) | 年平均増加率(%) |
|------|-------|-----------|------------|-----------|
| 1964 | 10 | 106 | — | — |
| 1982 | 12 | 372 | 15 | 7.22 |
| 1990 | 37 | 11,795 | 1,428 | 54.04 |
| 2000 | 54 | 224,688 | 21,289 | 34.27 |
| 2008 | 55 | — | — | — |
| 2011 | 55 | 795,000 | — | — |

注：中国において公認の民族は 56 あり，ここでの「少数民族」とは，漢族以外の 55 の民族を指す。

出所：張繼焦「試論城市少数民族的社交与族际交流——以深圳市为例」『广西民族研究』2004 年，2 期，37-42 ページ。郝時遠，王延中，王希恩主編『中国民族發展報告 2015』社会科学文献出版社，2015 年，323 ページ。

燕晨の研究によると，深圳の少数民族はすべて中国の内地⁵⁾ から来ており，来深ルートは主に 3 つあると指摘されている。タイプ 1 は，転勤や学校卒業後の「分配」（就職先の指定）等により深圳に定着するようになった人々である。この場合の少数民族はその多くがある種の技能を持っているか或いは教育水準が高い人々で，政府機関や，新聞，教育，衛生などの部門において仕事に就いており，後に政府機関の高官や会社の社長や社会の著名人になった人が少なくない。タイプ 2 は，少数民族の農村部等から一般労働者（「招工扶貧」）として深圳に来た人々で，深圳の少数民族の大半を占めている。タイプ 3 は，少数民族が個人として深圳に商売に来た人々である。このタイプ 2 と 3 の人々の多くは流動人口，非戸籍人口，或いは暫住人口で，教育水準がタイプ 1 の人よりは平均的に見て低い。この 2 タイプの一部の人々は成功し深圳の戸籍を獲得し，一部は故郷に帰り，さらに一部は永遠に「暫住」していこうとする。1980 年代までは，転勤，分配などの形，つまりタイプ 1 で深圳に来た少数民族が大多数であったが，1990 年代以降はタイプ 2 と 3 が増加している。西部と東部沿海地区との地域間の経済格差が主な人口移動の原因となっている⁶⁾。

このような移動のタイプから今の深圳の少数民族の階層の状況を発生論的に説明することができる。

2. 朝鮮族の国内移動の全体像

朝鮮族は，遠く言えば清末清初以来約 400 年の間，朝鮮半島からいろいろな原因で中国に移住した人々及びその子孫で，近く言えば主に清末民初から移住してきた朝鮮人及びその子孫だといえる。その朝鮮族が中国で多く集住していた地域は，吉林省，黒竜江省，遼寧省と内モンゴル自治区であったが，近年他地域への移住が進み，上記の中国における伝統的居住 4 地域合計の比率は 99.23%（1982 年）→ 98.30%（1990 年）→ 93.41%（2000 年）→ 88.80%（2010 年）

と下がっている。ただし、遼寧省は吉林省や黒龍江省とは異なり、移動元でもあるが移動先でもあり、1982年から2010年まで一貫して増え続けている。その理由としては、遼寧省には大連という沿岸都市があり、日本語や韓国語を使えるチャンスが他の両省より大きいことが考えられる。

逆に、伝統的居住地域以外は1982年にはわずか8,421人、0.49%に過ぎなかったものが、2010年には185,345人、10.13%にまで増大した。とくに、(深圳を含む)広東省は1982年に0.01%だったものが、2010年には1.02%になり、東北3省以外の第4位になっているが、構成比は28年間で約100倍になっており、他のいずれの地域よりも増加倍率が高い地域である。

表2-2 2010年に朝鮮族が5000人以上滞在する地域の朝鮮族人口の変化

(比率単位：%)

| | 1982 | | 1990 | | 2000 | | 2010 | |
|-----------------|-----------|--------|-----------|--------|-----------|--------|-----------|--------|
| | 人数 | 比率 | 人数 | 比率 | 人数 | 比率 | 人数 | 比率 |
| 伝統的居住地域 合計 | 1,751,547 | 99.23 | 1,890,550 | 98.30 | 1,797,057 | 93.41 | 1,625,974 | 88.80 |
| 吉 林 | 1,104,071 | 62.55 | 1,183,567 | 61.54 | 1,145,688 | 59.55 | 1,040,167 | 56.81 |
| 黒竜江 | 431,644 | 24.45 | 454,091 | 23.61 | 388,458 | 20.19 | 327,806 | 17.90 |
| 遼 寧 | 198,252 | 11.23 | 230,719 | 12.00 | 241,052 | 12.53 | 239,537 | 13.08 |
| 内 蒙 古 | 17,580 | 1.00 | 22,173 | 1.15 | 21,859 | 1.14 | 18,464 | 1.01 |
| 伝統的居住地域 以外合計 | 8,421 | 0.49 | 22,374 | 1.15 | 94,172 | 4.88 | 185,345 | 10.13 |
| 山 東 | 939 | 0.05 | 3,362 | 0.17 | 27,795 | 1.44 | 61,556 | 3.36 |
| 北 京 | 3,905 | 0.22 | 7,710 | 0.40 | 20,369 | 1.06 | 37,380 | 2.04 |
| 上 海 | 462 | 0.03 | 742 | 0.04 | 5,120 | 0.27 | 22,257 | 1.22 |
| 広 東 | 154 | 0.01 | 810 | 0.04 | 11,249 | 0.58 | 18,588 | 1.02 |
| 天 津 | 816 | 0.05 | 1,820 | 0.09 | 11,041 | 0.57 | 18,247 | 1.00 |
| 河 北 | 1,737 | 0.10 | 6,713 | 0.35 | 11,783 | 0.61 | 11,296 | 0.62 |
| 江 蘇 | 305 | 0.02 | 963 | 0.05 | 5,048 | 0.26 | 9,525 | 0.52 |
| 浙 江 | 103 | 0.01 | 254 | 0.01 | 1,767 | 0.09 | 6,496 | 0.35 |
| 総合計 | 1,765,204 | 100.00 | 1,923,361 | 100.00 | 1,923,842 | 100.00 | 1,830,929 | 100.00 |

出所：国务院人口普查办公室、国家统计局人口统计司編『中国1982年人口普查資料（電子計算機匯総）三、民族』1985年、2-15ページ、国务院人口普查办公室、国家统计局人口统计司編『中国1990年人口普查資料』中国統計出版社、1993年、300-319ページ
中華人民共和国国家统计局『2000年人口普查』
<http://www.stats.gov.cn/tjsj/pcsj/rkpc/5rp/index1.htm> (2015.7.11 アクセス)
中華人民共和国国家统计局『2010年人口普查』
<http://www.stats.gov.cn/tjsj/pcsj/rkpc/6rp/indexch.htm> (2015.7.11 アクセス)
から筆者作成。

3. 朝鮮族の深圳への移動要因

朝鮮族の深圳への移動要因は日系企業と韓国系企業の進出による日本語・韓国語人材の需要、改革開放後の発展によるビジネスチャンス、家族連帯移住にまとめられる⁷⁾。第一に、日系企業と韓国系企業の進出による日本語・韓国語人材の需要である。2009年時点で1200万人の深圳人口の中で約3万人の朝鮮族がいた。広東省には朝鮮族が8万人おり、中でも深圳は朝鮮族人口が一番多い都市である。その背景には、1980年に深圳が経済特区になり、投資誘致のために外国企業に対して税の減免や土地貸与などの面で多くの投資優遇措置を付与するようになった（招商引資）ことがある。1980年代に、多くの日本企業が深圳に進出したが、事業を展開するには通訳を数多く必要とした。広東省には日本語の出来る人が少なく、東北三省から日本語通訳ができる人材が深圳に移動して行ったが、その中でも朝鮮族は中学校から日本語を学んでいたことから大きな比重を占めた。朝鮮族にとってこれは得難いチャンスであった。東北の大学で日本語教師をしていた人ですら深圳に移動した。

また、1992年の中韓国交樹立により、多くの韓国企業が広東省などの沿岸都市に進出することにより、日本語を学んでいない朝鮮族も同様に通訳などとして東北三省から沿海都市に移動するようになった。日本語は外国語であるため、朝鮮族の中学校、高校の授業で主に学ばれるが、東北社会の言語環境にはまったく日本語を日常生活で使う機会がないので、通訳を担当できる人々はかなりの学歴や日本語の勉強歴が長い人でなければならない。しかし、朝鮮語は日本語の習得の難易度とはかなり異なる。90年代はじめの頃まで、東北朝鮮族は主に朝鮮族村を単位に、朝鮮語を語る村の言語環境で暮らしていたため、村の朝鮮族学校などでも全部朝鮮語で授業がなされただけでなく、ほぼすべての日常会話も朝鮮語により行われていた。つまり彼らは朝鮮語を母語としており、特別な学歴を必要としなかったのである。

このような80年代と90年代の日本企業と韓国企業の中国沿海地区進出は、朝鮮族に新しい仕事の場を与えただけではなく、新しい技術を学び、企業の管理者としての資質を向上させる大きなきっかけにもなった。

第二に、改革開放後の深圳の発展がもたらしたビジネスチャンスも移動要因となっている。1978年の改革開放後、1980年に深圳は中国の最初の経済特区になった。「深圳に行って一旗揚げよう」（去深圳闖）という言葉があるように、深圳は個人の努力と能力に比例して収入や何らかの見返りが得られやすい環境にあった。深圳は香港に近く、ヒト・モノ・カネの流動は中国の他のどの区域よりも頻繁になされていた。深圳には起業を促進する政策が他の地域より充実しており、たとえば、税金が他地域より低かったり、合弁企業が許されていたり、という政策上の優遇もなされていた。深圳は中国の中でも最も起業しやすい環境にあり、あらゆる層の人々が深圳に行って起業したいという夢を持った。78年からの深圳の人口推移を見れば、その人口流入の激しさが見てとれる。東北3省に集住していた朝鮮族も次々と新天地を求めて夢

を抱いて南端の深圳に来るようになった。

このような背景の下で、1990年代ごろから、広東省の朝鮮族の起業も盛んに行われるようになった。2004年の時点で広東省に朝鮮族企業は2,000⁸⁾社余りあり、その地域的分布を見ると、広東省の省都である広州ではなく、経済特区である深圳に集中している⁹⁾。

第三に、家族連帯移住形態がある。最初に移動した人々は、深圳での生活基盤がある程度見通しが立てば、親、配偶者、子供などを呼び寄せる。彼らは特に何らかの職を求めていくわけではなく、扶養、生活、教育などのために、移動するのであり、これも一つの大きな移動要因となっている。

第3章 深圳在住朝鮮族の社会状況

本章では深圳在住朝鮮族の社会状況を確認するため、まず全国朝鮮族の年齢分布と学歴とに照らしてその特徴を描き出し、次に深圳市の漢族の職業と業種とに照らして深圳朝鮮族の特徴を更に明確にする。

2010年深圳と全国の人口センサス数値によると以下のとおりである。全国的に見ると、朝鮮族の人口は1,830,929人で、中国総人口の0.14%を占め、民族人口順にみた場合第15位に位置する¹⁰⁾。しかし、実際中国に戸籍が置かれたまま、海外に滞在している朝鮮族は、2016年現在韓国だけでも75~80¹¹⁾万人（中に帰化者が10万人ぐらいいる）であると言われていることを鑑みると、中国に滞在している朝鮮族の人口率は更に低いと推定できる。一方、深圳における朝鮮族人口は6,318人で、深圳総人口の0.06%を占め、民族人口順からすると第11位である¹²⁾。この統計値は、2005年の黒竜江新聞社による調査結果——深圳在住の朝鮮族人口は30,000人である——とはかなりの差がある。仮にその数値で深圳における朝鮮族人口の構成比を計算すると、0.29%になる。つまり、深圳における朝鮮族の人口率は全国の平均値の2倍以上に達していることが分かる。全国の朝鮮族人口率と、東北の朝鮮族人口率がともに激減する中で、深圳を始めとした大都市の朝鮮族人口率が増えているのは一見矛盾しているが、そうでもない。改革開放による近代化と都市化と、グローバル化が同時並行しているため、生活圏のトランスナショナル化、海外進出、都市進出により、朝鮮族には上述通りの現象が起きているのである。

以下では人口センサスのデータを用いて深圳と全国の平均を比較しながら、年齢、学歴、職業状況を分析していく。

1. 深圳朝鮮族の戸籍人口の年齢分布

朝鮮族は深圳に定住傾向を見せている。なぜなら、深圳の10歳未満、20代、30代朝鮮族人

表 3-1 朝鮮族の戸籍人口の年齢分布

| 年齢 | 全国平均 | 深圳平均 | 全国朝鮮族平均 | 深圳朝鮮族 |
|-------|--------|--------|---------|--------|
| 1～9 | 10.99 | 4.41 | 5.59 | 11.95 |
| 10～19 | 13.11 | 10.21 | 7.47 | 4.75 |
| 20～29 | 17.14 | 36.52 | 16.71 | 27.24 |
| 30～39 | 16.15 | 24.41 | 16.01 | 32.13 |
| 40～49 | 17.28 | 14.28 | 19.61 | 12.51 |
| 50～59 | 12.01 | 4.50 | 17.61 | 6.60 |
| 60～69 | 7.48 | 1.86 | 9.86 | 3.60 |
| 70～79 | 4.26 | 0.84 | 5.73 | 1.11 |
| 80～89 | 1.42 | 0.22 | 1.33 | 0.11 |
| 90～99 | 0.15 | 0.04 | 0.10 | 0 |
| 100～ | 0 | 0 | 0 | 0 |
| 合計 | 100.00 | 100.00 | 100.00 | 100.00 |

出所：深圳市統計局，深圳市人口普查弁公室編『深圳市 2010 年人口普查資料』中国統計出版社，2012 年，119-178 ページ，中華人民共和国国家統計局『2010 年人口普查』「2-1 全国各民族分年齢，性別の人口」から筆者作成。

口率は各々全国朝鮮族の平均人口率より高く，10 代と 40 代以上の人口率はそれぞれ全国朝鮮族の平均人口率より低いからである。すなわち，これは深圳の 40 代の朝鮮族は子供を郷里に残すことが多かったのに対して，20 代，30 代は深圳において育児をし，就学をさせている可能性が高いことを意味する。

深圳の人口は若く，深圳朝鮮族も若い。なぜなら，深圳の 20～39 歳人口は深圳総人口の約 6 割（60.94%）を占めており，全国平均値の 2 倍に達しており，また，深圳朝鮮族の 20～39 歳人口も全国朝鮮族平均値の 2 倍弱に達しているからである。それでは，なぜ深圳に若者が殺到しているのか。その原因は，深圳は創業都市，流動人口都市，仕事の都市であるからである。

2. 深圳朝鮮族の学歴

深圳朝鮮族は全国の朝鮮族より学歴が高い。深圳朝鮮族の短大卒以上の総人口率は 50.45% であることに對し，全国朝鮮族のそれは 15.96% である。逆に，高卒以下の人口率は全国朝鮮族の平均値のほうが高い。そのため，深圳朝鮮族は全国朝鮮族と比べて，高学歴者が多く，低学歴者が少ないゆえに，学歴が高いといえる。これは，深圳市の人口流入規制が厳しいにも関わらず移住が許された人々は一定の文化水準を持っていることの反映でもある。

次に，深圳の宝安区朝鮮族の学歴について検討する。宝安区は広東省朝鮮族連合会¹³⁾が

表 3-2 2010 年朝鮮族の 6 歳以上総人口の学歴別人数構成比

(単位：%)

| | 無通学歴 | 小卒 | 中卒 | 高卒 | 短大卒 | 大卒 | 修士卒 | 6 歳以上 総人口率 |
|--------|------|-------|-------|-------|-------|-------|------|---------------|
| 全国朝鮮族 | 1.29 | 13.42 | 43.46 | 25.87 | 7.40 | 8.01 | 0.55 | 100.00 |
| 深圳朝鮮族 | 0.31 | 7.25 | 14.36 | 27.62 | 25.63 | 21.99 | 2.83 | 100.00 |
| 宝安区朝鮮族 | 0.25 | 7.87 | 18.98 | 31.65 | 25.85 | 14.49 | 0.91 | 100.00 |

出所：深圳市統計局，深圳市人口普查弁公室編『深圳市 2010 年人口普查資料』中国統計出版社，2012 年，深圳市宝安区統計局，宝安区第六次全国人口普查領導弁公室『深圳市宝安区人口普查資料』中国統計出版社，2012 年，中華人民共和国国家統計局『2010 年人口普查』より筆者作成。

置かれたところであり，深圳市の中でも朝鮮族が比較的多く働いている地域でもある。宝安区の朝鮮族の学歴は深圳朝鮮族の平均学歴と比べると中間に集中している。宝安区朝鮮族の小卒から短大卒までの人口率はそれぞれ深圳朝鮮族のそれらより高い。それと同時に，無学歴人口率と大学卒・修士卒人口率は深圳朝鮮族の平均値より低い。これらは宝安区ではサービス業に従事するか商業をする人が多く，高学歴を必要とする業務に従事する人が少ないことを反映している。また，同時に無学歴者もまた生存しにくいところでもあることが分かる。

3. 深圳朝鮮族の職業と業種

深圳の朝鮮族は漢族に比べて，単純労働者が少なく，比較的高い経済的・社会的地位に置か

表 3-3 2010 年深圳の朝・漢民族別前 4 位業種分布率表

| 順位 | 朝鮮族 | | | | 漢族 | | | |
|----|---------------------------|-------|--------------------|-------|---------------|-------|--------------------|-------|
| | 業種 | 従事率 | 職業 | 従事率 | 業種 | 従事率 | 職業 | 従事率 |
| 1 | 製造業 | 47.48 | 商業，サービス業人員 | 35.22 | 製造業 | 54.21 | 生産・運輸設備の操作人員及び関連人員 | 46.47 |
| 2 | 卸売と小売業 | 26.42 | スタッフと関連人員 | 19.81 | 卸売と小売業 | 16.92 | 商業，サービス業人員 | 27.77 |
| 3 | 宿泊と飲食業 | 4.72 | 技術者 | 17.30 | 宿泊と飲食業 | 4.37 | スタッフと関連人員 | 11.04 |
| 4 | 情報伝送，コンピューターサービスとソフトウェア産業 | 2.83 | 生産・運輸設備の操作人員及び関連人員 | 16.04 | 輸送，保管及び郵便サービス | 3.90 | 技術者 | 10.33 |

出所：深圳市統計局，深圳市人口普查弁公室編『深圳市 2010 年人口普查資料』中国統計出版社，2012 年，402-404 ページから筆者作成。

れている。第一に、生産・運輸設備の操作に従事する朝鮮族は漢族より30%ほど低く、それ代わりに企業法人を含めた責任者、技術者、スタッフ、サービス業に従事する朝鮮族は漢族より各々平均7~8%ぐらい高く、さらに、第一次産業に従事するセンサス上の人口はゼロである。第二に、製造業への従事率が漢族より7%ぐらい低く、卸売と小売業への従事率が10%ぐらい高い。その原因として考えられるのは、朝鮮族がその語学能力を活かし、深圳に進出した日系・韓国系企業に管理スタッフとして雇用されることや、管理スタッフとしての経験と人脈を活かして自ら起業することも少なくないことである。

第4章 深圳朝鮮族コミュニティの形成とその機能

—広東省朝鮮民族連合会と世界海外韓人貿易協会（OKTA）深圳支部を核とする展開—

1. 深圳朝鮮族コミュニティの中核としての広東省朝鮮民族連合会と世界海外韓人貿易協会（OKTA）深圳支部

深圳朝鮮族コミュニティの形成と維持において、欠かせない二つの団体がある。すなわち、広東省朝鮮民族連合会と世界海外韓人貿易協会（OKTA）深圳支部（以下、OKTA 深圳支部）である。これらの両団体は深圳朝鮮族コミュニティの社会、文化、経済に重要な役割を果たしている。

深圳朝鮮族コミュニティは、深圳の朝鮮族に民族アイデンティティを確認させながら、ビジネスも推進する役割を果たしている。民族アイデンティティを確認させる連合会とビジネスを推進させる OKTA 深圳支部は、機能を分担しつつ、相互補完関係にあり、互いの機能を相互に強化し合っている。コミュニティがビジネスだけを目指すのであれば、通常それほどの連帯を必要としないだろう。また、民族アイデンティティを確認させるだけの団体と見るにも、経済効果を重視している様子が見える。

以下では、広東省朝鮮民族連合会と OKTA 深圳支部の順で、それぞれの設立経緯と団体の果たす機能を分析する。

2. 社会文化的な民族性を媒介としたコミュニティ—広東省朝鮮民族連合会の活動を中心に—

1) 広東省朝鮮民族連合会の成立

広東省朝鮮民族連合会（以下連合会）は광동성 조선민족연합회と、The Chaoxian Minority Union in Guang Dong の朝、英の二言語による名称を持っている。連合会本部の所在地は中国・深圳である¹⁴⁾。連合会の設立経緯は以下のとおりである。1980年代に入り、経済特区である深圳市を中心に、広州、惠州、東莞、珠海、中山などの十数の広東省の各都市に朝鮮族が移住しはじめた。2004年の時点で、広東省における朝鮮族企業数は2,000あまりに達し、80,000人

あまりの朝鮮族が広東に居住するようになってい¹⁵⁾。このように広東省における朝鮮族人口の増加という背景のもとで、黒竜江省寧安市出身の崔勇均（連合会の第一期会長）を始めとした数十人の朝鮮族は、「民族のアイデンティティを再確認し、朝鮮民族の相互交流」¹⁶⁾を図り、省級団体（単位）である広東省朝鮮民族連合会を、2004年8月8日に設立させた。第一期理事の一人である金光玉（第二期女性協会会長でもある）は、連合会設立当初の思いを以下のように語ってくれた。

10年近く故郷を離れて遠い深圳で暮らしていると、故郷の食べ物も懐かしくなるし、ここ（深圳）に来ていた両親も故郷の親戚に会いたがっていたのよ。しかし、来たばかりの時は朝鮮族はあまりなくてね、最初は韓国料理屋などでご飯を食べる時に、あの人も朝鮮語を話すんだと気付いたら友だちになって、またその友達から朝鮮族の友達を紹介されて、そうする中で、だんだん実は広東にいる朝鮮族が多いんだと分かるようになったの。それともう一つは当時我々が何を考えたかという、二世の朝鮮語問題だよ。ここでは中国語以外に広東語も話されて、中国語や広東語を職場で使ったりすると、朝鮮語はあまり使わなくなる。特に二世たちは最初から漢族学校に入るのよ、そもそも朝鮮語ができないのよ。それでとにかく民族の伝統を受け継いで行こうと思って、そうするには朝鮮語を教えるべきだと思ったの。その頃、以前中学同級生だった崔さん（第一期会長）からね、ここも朝鮮族が多いから、運動会をすればもっと人が集まるはずだから、一緒にやってみないかと言われて。・・・しかし故郷を離れたところに出ていけば、やはり組織というものが必要だからね、当時崔さんもいろいろと他の朝鮮族も呼んで、連合会を設立させることに決めたの¹⁷⁾。

金さんの話をまとめると、連合会を設立させる理由は、深圳は故郷（東北地区＝朝鮮族の集住地区）とは違って、①社会的には政府主導の少数民族運動会の定期的開催がなく、②文化的には朝鮮族の公立学校がなく、③経済的には朝鮮族の経済ネットワークが形成されていなかったからだということが分かる。そのような故郷とは全く異なる環境に適応しようと工夫する過程で、彼（女）らが有効に必要な手段だと思ったのが、連合会を立ち上げることとなったのであろう。

2016年現在連合会は、朝鮮族老人協会、青年協会、女性協会、週末学校、サッカー協会、ゴルフ協会などの下部組織を持っており、1,000人あまりの会員で活性化されている。深圳市に本部が置かれている他、広州市、東莞市、惠州市、中山市にも支部が設けられている。また、朝鮮族弁護士たちからなる連合会の法律顧問団が、広東地域における朝鮮族に法的サービスを提供している。連合会は周期的に活動を主催しており、例を挙げると体育大会、文芸公演、民族祝祭等がある。それ以外に各下部組織が各々主催する行事がある。2014年11月20日の時点で、連合会に所属する企業体数は380になっており、これは広東省の朝鮮族企業数総数と言

われている 2,000 あまりの約 20%に達している。

2) 広東省朝鮮民族連合会の機能

まず、連合会の会則から、広東省朝鮮民族連合会は民族アイデンティティを確認させる役割を果たしていることがわかる。

連合会の会則の第二条に同会設立の趣旨が書かれている。「広東省朝鮮民族連合会は華南地域で新しく形成される 10 万人あまりの韓民族社会を基に、民族の団結と親睦を図り、相互交流を通じた情報の交換と、民族の優秀な伝統文化を継いでいき、企業の経営活性化支援に注力し、多くの企業人たちが同胞社会の共益事業に積極的に参与するようにし、国家と民族の経済発展に貢献する名実ともに親善団体に成長することである。」第四条には第二条の趣旨を達成するために進行する事業を書いている。①広東省同胞社会の各種集まり及び活動、②会員間の相互交流、③人材養成及び人材交流のネットワーク構築、④民族風俗習慣・言語・礼儀教育、⑤同胞企業人たちの事業の発展及び創業支援、⑥経済法律諮問及びその他である¹⁸⁾。この会則から、広東省朝鮮民族連合会は民族アイデンティティを確認させることをその設立趣旨としていることがわかる。

次に、実際の活動内容について説明する。広東省朝鮮民族連合会は年間を通じて以下のとおりの活動を行っている。時期別に連合会の活動¹⁹⁾をみると、毎年 3 月に連合会の新年会が開かれ、毎年 12 月末に連合会の送年会が開かれる。また、偶数年の 11 月に広東省朝鮮族伝統文芸公演を、奇数年の 10 月に広東省朝鮮族民族祝祭を行っている。今までの活動実績を見ると、それ以外に体育大会が 2004 年から偶数年の 10 月毎に開かれ、朝鮮族企業家ゴルフ大会と朝鮮族老人門球大会が開かれている。その活動実績の中で一番延べ参加人数が多かった活動は 2009 年 10 月に開かれた第三回広東省朝鮮族民俗祝祭であった。この民俗祝祭についての連合会の自らの記事を通じて、民族アイデンティティを強化させるプロセスを見てみよう。これは実践的根拠になる。

朴 (2014) によっても指摘されたように、東北の朝鮮族コミュニティと違い、大都市や沿岸都市における朝鮮族コミュニティの再構築を促している一つの行事は、朝鮮族が積極的に開いている「民俗文化節」である。深圳においてはまさに「広東省朝鮮族民俗祝祭」がそれに当たる。2009 年の例を見ると、3 日延参加人数 15,000 人は、広東省の実在朝鮮族人数と言われている 80,000 人の 20%弱を占めており、これはかなりの影響力を持っている行事だと言っても過言ではない。祝祭会場は深圳市のあるサッカー場（喜地根サッカー場）になっていたため、祝祭の組織委員会では広州、東莞、惠州などの都市から深圳の会場まで高速バスを配置し、老人と子供及び参加家族に便利を与えた。祝祭の種目としては、伝統的な群舞、キムチ作り、餅つき示範、ビビンパませ、サッカー、バレーボール、陸上、老人及び子供種目、相撲、板飛び、

ユンノリ等がある。この種目を整理してみると、伝統文化を忘れないように実践を見せることで教えていること、あるいは深圳朝鮮族に実践してもらうことで伝統遊びを身につけさせていることが分かる。つまり、連合会はこのような民俗文化節を通じて、人々に見せ、聞かせ、実践させることを通じて、民族文化を教えたり想起させたりして、民族出自を再確認させる役割を果たしている。

この2009年の祝祭に対し、連合会の李鉄虎会長はこのように語っている。「今回の民俗祝祭は暖かい笑顔と面白い民俗遊び文化で、後世たちに民族の伝統文化を継承させ、このところに定着して、生きていく我々の民族アイデンティティをより深く認識させ、文化生活に新たな活力素を与えるよい契機になった」²⁰⁾。これは連合会が民族アイデンティティをいかに再確認させるかについての的確なまとめだとも言える。

第三に、週末学校の設立と運営からも連合会がアイデンティティの再確認の役割を果たしていることがわかる。週末学校は連合会が出資し、運営している日曜学校である。この学校は2011年8月に開始され、8月から12月、2月から6月の2セメスター体制となっている。授業科目は「韓国語」「音楽」「舞踊」「礼儀」があり、クラスは学生の韓国語力により3つに分けられている。学生の年齢分布から見ると、4歳から10代前半までの学生が多く、30～40代の大人も学生として数人おり、2015年現在、合計50人ぐらいの受講生がいる。その内訳は深圳在住の朝鮮族二世が主で、一部は朝鮮族と漢族のハーフも7～8人おり、またその7～8人のハーフらの一部の片親（主に朝鮮族と漢族が結婚した場合の漢族親）により構成されている²¹⁾。以下は、2011年に週末学校が開設してから、2015年のインタビュー当時まで、週末学校の行政・人事・財務責任者であり、授業監督でもあったPさんの証言²²⁾である。

・・・私達の世代までは大丈夫ですが、広東省で生まれた（朝鮮族）子供たちは、家政婦から小中高校、社会まで全部漢族社会に囲まれて、自分が朝鮮族であるかどうかも知らず、朝鮮語も全然使わないし、この子供たちが育ったらわが民族を全部忘れてしまうのではないかという憂慮があったんですよ。それで連合会の会長団がこの話を聞いて、心を痛めてね、それじゃわれわれの言葉、われわれの文字を残してあげなきゃと思ったんですね。それで韓国人の先生を招いて教えているんです。・・・週末学校は連合会の一つの民族事業で、端的に言うと、われわれの世代で文化と言葉を断絶させたくないからです。実は週末学校は毎年赤字だけど、会長団がずっとそれを補ってくれてるの。・・・

連合会が運動会を組織したりすると、この子供たちもチマチョゴリを着て、開幕式に参加するんです。・・・私たちの言葉、文字、礼儀、伝統文化を伝えて、朝鮮族とは何者で、チマチョゴリとは何物で、ハングルを少しでも覚えるようにすることが目的なんです。でも週末学校の終了式の時に、子供たちが朝鮮語の短い文章を読む時間があってね、アクセントはかなりおかしいんだけど、読めるのは読めるので成果はあると思うよ。

Pさんの話からは、週末学校の設立は移住一世と二世の文化断絶への憂慮を契機としており、まさに子供の民族アイデンティティの構築を促すことが目的になっていることが分かる。さらに卒業式と連合会の運動会で、民族服飾や民族運動会を子どもたちに体験し、実践してもらうことで、一層民族文化を身に覚えさせている。このように週末学校という場を借りて、連合会は深圳在住の朝鮮族二世に民族アイデンティティを構築させている。一方で朝鮮語ではない標準韓国語を教える理由について尋ねたところ、「日常では朝鮮語²³⁾が話しやすいけど、社会に出るとやっぱり韓国語をたくさん使うから、親たちも韓国語を教えるよう求めているんです」と回答された。つまり、週末学校は継承させたい民族文化・言語と、実利性を帯びた韓国語との二重の要請からなっている存在だといえようが、いずれにせよ、結果的に民族アイデンティティを促したことは間違いないであろう。

このように、われわれは民族アイデンティティを再生産する場として連合会は役割を果たしていることがわかった。しかし、それと同時に連合会のもう一つの側面にも注目する必要がある。なぜなら、連合会の沿革²⁴⁾には以下のことも書かれている。「連合会は2005年から中、高、大学生たちの韓国訪問と韓商会、世界海外韓人貿易協会会議にも積極的に参加してきた。今後連合会は産業別情報システムを備え、民族企業のより安定した基盤造成を通じて、起業者とその企業の発展に積極的に後援する計画であり、同胞企業の企業或いは小規模企業の資本力不備問題を解決するため、第二金融圏の形成を推進中にある」。ここからは、連合会は民族経済の基盤生成をも一つの目標として、積極的に働いていることが分かる。そのような連合会の経済的連携構造が、朝鮮族の文化とアイデンティティを守り、維持させる役割を果たすための基盤になり、連合会をより強固なものにする。

3. 経済を活性化させるコミュニティ——OKTA 深圳支部を中心に

1) OKTA 深圳支部の成立

世界海外韓人貿易協会は英語名 World Federation of Overseas Korean Traders Associations、朝鮮語名 세계한인무역협회である。日本では支部によっては「世界韓人貿易協会」とするところもある。英語名から OKTA と略称される。OKTA は 1981 年にアメリカを本部とし設立され、1982 年に日本に本部が移動、1990 年にはさらに韓国に本部が移動している。この団体の設立目的は、「母国（韓国）²⁵⁾との貿易増進に寄与し、母国商品の海外市場進出に貢献し、会員相互間の情報交流を通じた利益増進を図り、海外韓人の経済ネットワークを結成すること²⁶⁾」である。2016 年現在、OKTA は 67 ヶ国に支部を持っており、中国には 23 の都市に支部が設けられている。その中の一つとして、2009 年 9 月 12 日に OKTA 深圳支部が設立された。OKTA 深圳支部が成立するまでは、深圳の朝鮮族企業人は OKTA 広州支部を通じて OKTA の行事に参加していた。彼らは中小企業を経営する深圳在住の朝鮮族企業人で、現在はほぼ

OKTA 深圳支部の正会員になっている²⁷⁾。

深圳 OKTA 支部は、正会員（中国語では会長・副会長であるが、日本語では正会員という意味を成す）と次世代会員に分けられる。正会員の入会条件の一つに、「原則的には企業法人あるいは株主であること（証明資料の提示が必要）」があり、それゆえ OKTA 深圳支部の正会員は全員企業家である。次世代会員には、企業家とまではいえない、ホワイトカラーや起業したばかりの若者が多く、OKTA 深圳支部会員は経済的には朝鮮族社会の中で中、上層階級である。OKTA 深圳支部の第一期会長になったのは、連合会の副会長の一人でもあった南基学であり、OKTA 深圳支部の第一期副会長 5 人の内、3 人が連合会の副会長を兼任していた。

2015 年現在、OKTA 深圳支部のメンバーはほぼ朝鮮族であるが、深圳在住の韓国人もいる。

2) OKTA 深圳支部の機能

OKTA 深圳支部はビジネスの活性化を目的にして、活動もそのようにしている。以下では、設立者と参加者の動機の両方から、OKTA の性格と役割を見ていく。

まず、設立者の動機から OKTA は経済中心であることが分かる。

OKTA 深圳支部の設立は深圳のビジネスマンの交流の便宜を図り、深圳支部が設立されたのである。したがって、その設立経緯からすると経済中心の団体であることは疑いのないことである。またその名称が「世界（海外）韓人貿易協会」であるように、これは韓民族という連帯をきっかけに貿易を促進させるための協会であることが分かる。

次に、参加者の動機から OKTA に参加する朝鮮族はビジネス向上を目指して入会し、それに関する資源を目的に取得しつつあることが分かる。参加者へのインタビューから見ると、OKTA への参加者の意図は皆が皆ビジネスのためではないが、その比重が大きかったし、当初それが一番の参加動機ではなかったとしても、ある期間参加していたら起業意欲が膨張し、ビジネスに関心を持つようになるケースも少なくない。その理由はこの協会が日頃行っている講座、話されている話題、関心事がビジネスに集中しているからである。

12 人のインタビュー²⁸⁾のまとめ数値から見ると、参加者の参加動機は大きくビジネス需要と非ビジネス需要に分けられる。ビジネス需要の一例として、OKTA の活動には参加しているが OKTA の次世代会員としては入会していない Q さんのケースを見よう。彼女は次のように語っている。

次世代にはやはり 20 代の子らが主に参加して、私はもう 30 を超えたし。入会したら役を取るようになりやすいけど、今私は起業しようとしている時期なので忙しいから、入会はしてないんだ。だけど、OKTA では、ビジネスや起業に関する知識と情報、そして人脈をたくさん得られるし、友達とも気が合うから、活動にはよく参加してる。(筆者:じゃ、会費は払わなくてもいいですよ?) うん。会費は払わないけど、大体毎回活動の時に参

加費を払わなければならないから、実は会費を払って参加費を免除してもらったほうが得かもよ。ははは。²⁹⁾

Qさんの話からは、正式に入会していないが、OKTAという境界線の両側を行き来している人が存在することが分かる。このような人は必ずしも経済的に厳しいから入会しないわけではなく、自らの都合に最良の選択としてプライベートの時間も確保できるし必要なビジネス情報も得られる「境界人」の役割を選択したのである。逆に、これはOKTAという団体がそれほどの柔軟性を持つ団体であることをも物語っている。

以上見てきたように、OKTAへの参加者は自らの生活をよりよく営んでいくために、情報に近づけ、同業者に近づけ、アイデアに近づけている。その一つの拠り所としてOKTAがある。すなわち、OKTAは情報、人材、人脈の交流の場であり、それらを育む空間としての役割を果たしているのである。その空間は境界がはっきりとあるわけではなく、核となる活動家、中心に近いところに位置している役員、会費を収めながら中心とは一定の距離を置く会員ら、会費を納めず境界の両側を行き来する人々、OKTAの活動には全然参加したことのない人々がいるように、その境界は伸縮可能で多孔的である。

ここまでは、OKTAは経済を重要視する団体であることを述べてきたが、経済のみに関わる団体と見るのは間違いである。なぜならその中で朝鮮族としての自覚を無自覚的に獲得するようになる役割がこのコミュニティには付与されているからである。OKTA次世代の会員Jさんの例が示唆的である。Jさんは、幼い頃から深圳で育った朝鮮族として、朝鮮族の言語文化生活習慣はほぼ知らず、むしろ朝鮮族に偏見を持っていた。しかし、OKTAに参加して、OKTAの中の朝鮮族と接触し交流することにより、朝鮮族そのものについても朝鮮族文化についても、認識を深めるようになる。その結果、「朝鮮族嫌い」だった状態から、「絶対朝鮮族女性と結婚する」という意思を持つようになった。実際、OKTAはほぼ全員朝鮮族からなっており、それゆえOKTAという場は一種の文化発信力を持っていると見ることができる。それはすなわち、そこに属している人々の意図とは必ずしも関係しているわけではないが、客観的にその人々からなる「朝鮮族文化」が創造され、発信されているということである。したがって、その場にいるJさんはビジネス関係を磨いていたが、結果的には朝鮮族についての認識が変わったのである。つまり、OKTAは単なる経済の活性化の役割を果たしているわけではなく、朝鮮族アイデンティティの再生産にも寄与しているのである。逆にそのような連帯感がOKTAの中のビジネス関係をより強固なものにする役割も果たしているであろう。

深圳朝鮮族コミュニティは、もちろん上記の二団体だけが含まれているわけではない。それ以外にも朝鮮族教会、民間のスポーツチーム、制度化されていない朝鮮族個人が数多くいる。しかし、上記の両団体が広東地域の朝鮮族コミュニティの形成において、経済、社会面における中心的役割を果たしていることは否定できない。

おわりに

図4-1は深圳朝鮮族コミュニティを人とその所属空間により図化したものである。実線は明確な境界が存在することを表し、点線は境界が不明確で柔軟であることを表す。つまり、深圳朝鮮族コミュニティは深圳という社会に置かれており、深圳朝鮮族コミュニティの中では連合会が主に文化継承の役割を担っており、OKTAは主に経済活性化の役割を担っている。しかし、両団体は人員面で重なっている部分があるだけでなく、機能面でも相乗効果を発揮している。連合会の会員として所属している人々と、OKTAの会員として所属している人々は、実線の中に含まれる人々で、会員ではないがその両団体の組織する活動に不定期的に参加する人々は実線と点線の間の空間に含まれる。もちろん深圳朝鮮族コミュニティイコールこの両団体の包括する範囲とは決して言えない。すなわち、この両団体の活動とは接触しないが朝鮮族としての自覚があり、散在或いは他の集まりとして存在する人々は深圳朝鮮族コミュニティ以内、連合会とOKTAの領域以外の空間に含まれる。さらに、「朝鮮族としての自覚のない朝鮮族」は深圳朝鮮族コミュニティ以外深圳社会以内の空間に含まれる。

連合会は、シャマーホーンのいう「一つまたは複数の象徴的要素に文化的焦点をおいているような一集団」を担う集団と見ることができ。なぜなら、東北の故郷で定期的に行われた運動会、朝鮮語、チマチョゴリといった象徴的要素に文化的焦点を置き、あるときはそれらを手段にしており、あるときはそれらを目的としているからである。また、運動会という場を作り、で出会った朝鮮族同士は朝鮮族としての自覚を共有しあうと同時に、お互いが後のビジネスをするときに使える人脈としても貯蓄される。また、週末学校という空間を作り、そこで民族語を継承させているだけではなく、標準韓国語が教えられることにより、韓国とのビジネスに活用できるようになる。しかし、疑いもなくその過程で朝鮮族アイデンティティの再確認も確実に行われている。

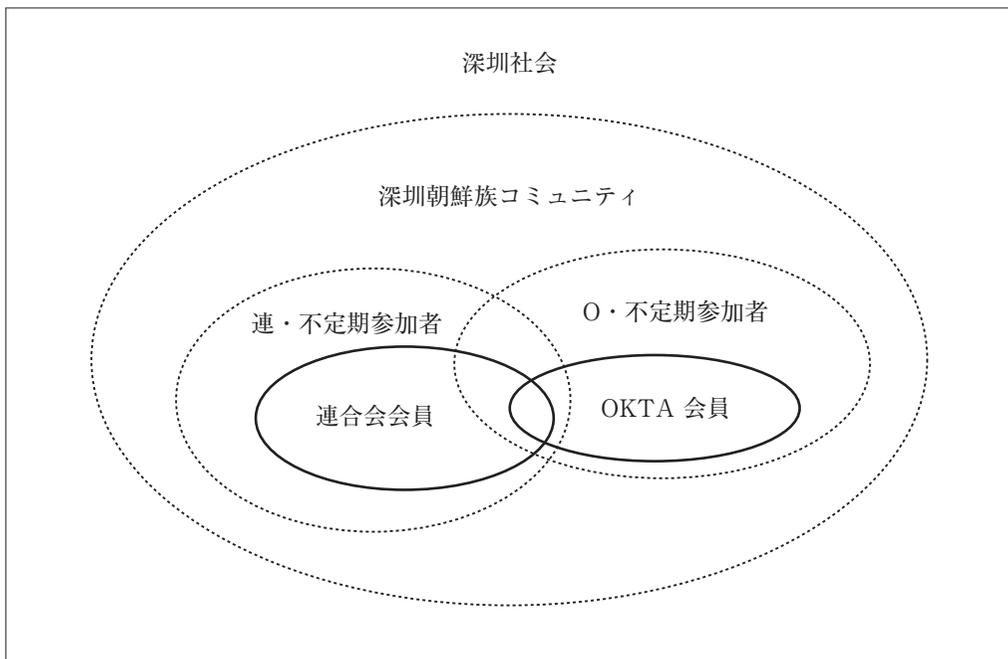
その一方、OKTA深圳支部は経済的動機を主たる目的とする団体であるが、連合会の活動と重なり合うことで、連合会の活動に経済的目的が付与され、逆に、OKTA深圳支部の活動に単純な経済活動以上の人的信頼関係を生み出すことになっている。

すなわち、ギアーツのいう「原初的愛着」はコミュニティ生成の必要条件ではあるが十分条件ではないことがわかる。なぜなら、朝鮮族同士の愛着と民族文化・言語に対する愛着が基礎にあるからこそ朝鮮族コミュニティが形成されるのは間違いないが、それだけでは深圳朝鮮族コミュニティの発展は説明できない。プラスのいうように、「用具的な性質」も中には重なりあっており、深圳朝鮮族企業家たちが相互の経済的利益を図る場としてのOKTAと不可分一体の形で展開されている。深圳朝鮮族コミュニティの形成にとっては、「原初的愛着」と「用具的

な性質」とのどちらも欠かせない必要条件である。ただし、そのコミュニティは所属する人々にとって、単にプラスのというような利用されるだけの関係ではなく、田辺のいうように、そこに集う人たちのアイデンティティの再確認の場ともなっている。なぜなら、朝鮮族コミュニティの経済・文化活動に参加することで、もともと周辺的な位置に置かれていた朝鮮族の人々が、経済活動の経験を身につけると同時に朝鮮族文化をも身につけ、団体の管理役になったり活動を主催するようになる。その過程で朝鮮族のアイデンティティも再確認され強化される。このようなコミュニティ形成のダイナミクスが朴（2004）などの先行研究に欠けていた点であり、本稿が新たに提起する点である。

しかし、調査の中で、深圳朝鮮族のアイデンティティは必ずしも一枚岩ではないことも明らかになった。ある人は「私は別に東北朝鮮族と何も違ってないと思う」と返答すれば、ある人は「我々深圳朝鮮族は東北朝鮮族とは全然違う。だって何をしてもビジネス向上などを考えながら生きているんだから、東北朝鮮族とは違う」と返答する人もいる。また、嗜好性などにおいても東北の朝鮮族と深圳の朝鮮族は微妙に異なっている。これは、深圳朝鮮族のアイデンティティに十分な多様性が存在することを物語っているし、それは世代、年齢、移住年限などのいろいろなことに左右されていることが推測できる。これについての詳しい検討は今後

図 4-1 深圳朝鮮族コミュニティ



出所：佐々木（2007：14）を参考に筆者作成。

の課題にしたい。

以上、深圳の朝鮮族コミュニティの形成について論じてきたが、これらが、深圳朝鮮族だけについていえるのか、それとも中国の他の都市の朝鮮族コミュニティにも言えるのか、どれぐらい当てはまり、どれぐらい異なるかについての検討は今後の課題にしたい。

注

- 1) Richard Schermerhorn, *Comparative Ethnic Relations: A Framework for Theory and Research* (New York: Random House, 1970), John Hutchinson and Anthony D. Smith eds. *Ethnicity* (Oxford University Press, 1996)
土田映子『「エスニシティ」概観：コンセプトの形成と理論的枠組』『グローバリゼーションと多文化共生、国際広報メディア研究科・言語文化部研究報告叢書 68』2007年、1-20ページ、6ページ。
- 2) 同上、7ページ。
- 3) Clifford Geertz, "Primordial Ties" in Hutchinson and Smith eds., *ibid.*, pp. 41-42, 初出 "The Integrative Revolution" in Clifford Geertz, *Old Societies and New States* (New York: Free Press, 1963).
- 4) Brass, Paul R., *Ethnicity and Nationalism: Theory and Comparison* (New Delhi: SAGE Publications, 1991).
田辺繁治「コミュニティを想像する——人類学的省察」『文化人類学』73巻3号、2008年、289-308ページ。
- 5) ここでの「内地」は香港、マカオ、台湾、深圳を含まない中国を指す。
- 6) 張継焦「試論城市少数民族的社会交往与族际交流——以深圳市为例」『广西民族研究』2004年、2期、37-42ページ。
- 7) 筆者の2015年9月5日から2015年9月15日までの聞き取り調査の結果によるものである。
- 8) 広東省朝鮮民族連合会「広東省朝鮮民族連合会 紹介」
- 9) 2015年9月26日のOKTA 深圳支部事務局長へのインタビューに基づく。
- 10) 中華人民共和国国家統計局「2010年人口普查」[2-1 全国各民族分年齢、性別の人口]
- 11) 『黒竜江新聞』(2016.2.4 ニュース) <http://hljxinwen.dbw.cn/system/2016/02/04/001062799.shtml>
『黒竜江新聞』(2016.2.4 ニュース) <http://hljxinwen.dbw.cn/system/2016/02/03/001062724.shtml>
2016.2.18 アクセス
- 12) 深圳市統計局、深圳市人口普查弁公室編『深圳市2010年人口普查資料』[2-1 全市各民族分年齢、性別の人口] 119-178ページから算出。
- 13) 広東省朝鮮民族連合会については、本稿の第四章で詳しく述べる。
- 14) 広東省朝鮮民族連合会「団体一般現況、団体代表者、団体実務責任者、団体紹介書」から作成。
- 15) 広東省朝鮮民族連合会「団体一般現況、団体代表者、団体実務責任者、団体紹介書」および個人名での「広東省朝鮮民族連合会紹介」などによる。
- 16) 同上。
- 17) 2015年9月18日に筆者が行ったインタビューに基づく。
- 18) 広東省朝鮮民族連合会「団体一般現況、団体代表者、団体実務責任者、団体紹介書」から作成。
- 19) 同上。

- 20) 吉林新聞が行ったインタビュー http://kr.chinajilin.com.cn/cxz/content/2009-11/29/content_29723.htm 2015.5.16 アクセス
- 21) 2015年9月14日, 週末学校責任者へのインタビューに基づく。
- 22) 同上。
- 23) ここで「朝鮮語」とは中国朝鮮族が日常で使用する言葉で, 「韓国語」とは韓国の標準語を指す。両者はアクセントと一部の単語で差異が見られる。
- 24) 広東省朝鮮民族連合会「広東省朝鮮民族連合会 沿革」に基づく。
- 25) ここに「母国(韓国)」と書いてあるが, それが中国朝鮮族が韓国を母国と考えているということの意味しているわけではない。一体どれぐらいの朝鮮族が韓国を母国と考えているかはさておき, この文章は, OKTA が設立する当初, 在米韓人を中心にした経済人らにより作成された協会の設立目的文であり, 深圳朝鮮族が直接書いた協会の目的文ではないため, 朝鮮族の母国観とは直接関係しないことを記しておく。
- 26) World-okta ホームページ <http://www.okta.net/homepage/contents/introduction/summary.asp> 2016.3.27 アクセス
- 27) 2015年9月26日のOKTA 深圳支部事務局長へのインタビューに基づく。
- 28) 2015年9月5日から2015年9月15日までの10日間を利用して, OKTA 深圳支部の会員12人にインタビューを行っている。インタビューの形式は半構造化インタビューであり, 男女比は5:7である。年齢分布を見ると, 20代後半と30代前半が各々6人ずつである。
- 29) 2016年2月16日, OKTA の活動に参加しているQさんへのインタビューに基づく。

参考文献

日本語（五十音順）

- イ・ソンヒ「中国朝鮮族の『移動のスケープ』とトランスナショナル・ファミリーの現状を実感して」『国際人権ひろば』112号, 2013年
- 韓光天「中国朝鮮族の都市移動の実態に関する報告」中国朝鮮族研究会叢書『朝鮮族のグローバルな移動と国際ネットワーク』アジア経済文化研究所, 159ページ
- 佐々木衛「都市移住者の社会ネットワーク——青島市中国朝鮮族の事例から」佐々木衛編著『越境する移動とコミュニティの再構築』東方書店, 2007年, 3-18ページ
- 田辺繁治「コミュニティを想像する——人類学的省察」『文化人類学』73巻3号, 2008年, 289-308ページ
- 土田映子「『エスニシティ』概観: コンセプトの形成と理論的枠組」『グローバリゼーションと多文化共生, 国際広報メディア研究科・言語文化部研究報告叢書68』2007年, 1-20ページ
- 松田素二「変異する共同体—創発的連帯論を超えて—」『文化人類学』69巻2号, 2004年, 247-268ページ

朝鮮語（ㄱㄴㅇ順）

- 광동성조선민족연합회 [광동성조선민족연합회 소개]
(広東省朝鮮民族連合会「広東省朝鮮民族連合会 紹介」)
- 광동성조선민족연합회 [단체일반현황, 단체대표자, 단체실무책임자, 단체소개서]
(広東省朝鮮民族連合会「団体一般現況, 団体代表者, 団体実務責任者, 団体紹介書」)

立命館国際研究 29-1, June 2016

- 권태환, 박광성 [중국 조선족 대이동과 공동체의 변화 - 현지조사 자료를 중심으로] [한국인구학] 27 권, 2 호, 2004 년, pp.61-89
(權泰煥, 朴光星「中国朝鮮族の大移動と共同体の变化——現地調査資料を中心に」『韓国人口学』27 卷, 2 号, 2004 年, 61-89 ページ)
- 예동근 [종족성의 자원화와 도시 에스닉 커뮤니티의 재구성 - 북경 왕징 (望京) 코리아타운 조선족결사체를 중심으로 -] 동북아문화연구 제 25 집 (2010) pp. 531~547
(芮東根「エスニシティの資源化と都市エスニックコミュニティの再構成——北京望京コリアタウンの朝鮮族社会団体をを中心に」『東北亜文化研究』25 集, 2010 年, 531-547 ページ)

中国語 (ピンイン順)

- 國務院人口普查办公室, 國家統計局人口統計司編『中国 1982 年人口普查資料 (電子計算機匯總) 三, 民族』1985 年
——『中国 1990 年人口普查資料』中国統計出版社, 1993 年
郝時遠, 王延中, 王希恩主編『中国民族發展報告 2015』社会科学文献出版社, 2015 年
朴光星「“壓縮型城市化”下的民族共同体“離散危機”與“重構運動”——基于对朝鮮族城市化進程的考察」『中央民族大学学报』41 卷, 3 期, 2014 年, 88-97 ページ
深圳市宝安区統計局, 宝安区第六次全国人口普查領導办公室『深圳市宝安区人口普查資料』中国統計出版社, 2012 年
深圳市統計局, 深圳市人口普查办公室編『深圳市 2010 年人口普查資料』中国統計出版社, 2012 年
相華「朝鮮族流動人口城市融入研究——以煙台, 威海, 青島為例」『黑龍江民族丛刊 (双月刊)』4 期, 2012 年, 59-65 ページ
張繼焦「試論城市少数民族的社会交往与族際交流——以深圳市為例」『廣西民族研究』2004 年, 2 期, 37-42 ページ
朱小丹主編『2015 廣東年鑑』廣東年鑑社, 2014 年

英語 (アルファベット順)

- Brass, Paul R., *Ethnicity and Nationalism: Theory and Comparison* (New Delhi : SAGE Publications, 1991).
- Geertz, Clifford., “Primordial Ties” in Hutchinson and Smith eds. *Ethnicity*, pp. 41-42, 初出 “The Integrative Revolution” in Clifford Geertz, *Old Societies and New States* (New York: Free Press, 1963).
- Hutchinson, John and Anthony D. Smith eds. *Ethnicity* (New York: Oxford University Press, 1996)
- Schermerhorn, Richard., *Comparative Ethnic Relations: A Framework for Theory and Research* (New York: Random House, 1970)

参考 URL

延辺州政府

<http://www.yanbian.gov.cn/tpltxl2012031611081743.jsp?infoid=16840> 2015.4.23 アクセス

OKTA 深圳支部

http://sangmin.oktashenzhen.net/sub01_4.php 2015.12.11 アクセス

朝鮮族の深圳市への移動とエスニック・コミュニティの形成（南）

吉林新聞

http://kr.chinajilin.com.cn/qihua/content/2005-12/31/content_56152.htm 2015.5.16 アクセス

吉林新聞

http://kr.chinajilin.com.cn/cxz/content/2009-06/30/content_34484.htm 2015.5.16 アクセス

金大順インタビュー

http://www.thesingle.co.kr/common/cms_view.asp?channel=501&subChannel=502&idx=5610 2015.12.2
アクセス

中華人民共和国国家統計局－2000年人口普查

<http://www.stats.gov.cn/tjsj/pcsj/rkpc/5rp/index1.htm> 2015.7.11 アクセス

中華人民共和国国家統計局－2010年人口普查

<http://www.stats.gov.cn/tjsj/pcsj/rkpc/6rp/indexch.htm> 2015.7.11 アクセス

東莞燁嘉電子科技有限公司

<http://dg.job5156.com/corp/1007071> 2015.12.11 アクセス

ヒューライツ大阪

<http://www.hurights.or.jp/archives/newsletter/sectiion3/2013/11/post-225.html> 2015.12.10 アクセス

World-okta ホームページ

<http://www.okta.net/homepage/contents/introduction/summary.asp> 2016.3.27 アクセス

（南玉瓊，立命館大学大学院国際関係研究科博士課程後期課程）

조선족의 심천 이주와 에스닉커뮤니티의 형성

본고는 중국동북지역을 중심으로 거주하던 중국조선족이 국내이주를 거쳐, 이주지에서 조선족 커뮤니티를 재구성하는 동기와 과정을, 심천을 사례로 고찰한 것이다.

우선, 심천 조선족 커뮤니티 형성의 전제가 되는 사회 조건으로, 조선족의 심천 이주 요인의 고찰, 심천 조선족의 사회적 속성을 정부 통계 및 인터뷰 조사자료에 근거하여 밝힌 뒤, 광둥성 조선민족 연합회와 세계해외한인무역협회 (OKTA) 심천지회의 두 단체를 중심으로 한 커뮤니티 형성을 제시하였다.

결론을 제시하면 다음과 같다. 광둥성 조선민족연합회는 조선족을 대상으로 문화 운동과 조선어 학습 지원 등을 실시하는 단체이고, 세계해외한인무역협회 (OKTA) 심천지회는 심천 조선족 기업가 단체이지만, 인원상 겹칠 뿐만 아니라 기능적으로 상호 보완적인 관계에 있다. 즉, 단순히 민족 정체성 유지를 위한 문화 운동이나 조선어 학습 뿐만 아니라, 거기서 형성된 관계는 비즈니스 네트워크로서의 역할도 하며, 또한 조선어가 아닌 “한국어”를 배움으로써 한국 기업과의 비즈니스에도 도움이 될 수 있다는, 경제적 이익과 연결되는 성격을 지니고 있다. 또한 반대로 세계해외한인무역협회 (OKTA) 심천지회는 조선족으로서의 문화 활동에도 참여함으로써, 회원 간의 상호 신뢰를 높여, 단순한 기업가 단체 이상의 유대를 유지할 수 있다 장점이 있다.

(남옥경, 리츠메이칸대학 국제관계연구과 박사후기과정)